

NON BOOK





「ノン・ブック」とは

既成の価値に対する不安と疑い——これが現代の特色です。

まさに「否定」の時代と申せましょう。

このとき私たちの「ノン・ブック」がスタートします。

これまでの考え方に、待てよ、と小首をかしげ、人間の明日をささえる新しい喜びを見いだそうとするシリーズです。

読者とともに「真に人間的な価値とはなんだろうか」を問いかけ、その答えを模索していきます。そのためにあらゆる従来の枠を取りはずして、自由な創作性で一冊一冊に取り組んでいくつもりです。

どんなことでも、あなたのご意見を歓迎します。

昭和四十五年十二月十五日

NON・BOOK編集部



NON・BOOK-43

スプーン一杯の幸せ——愛を語る三つの形

¥ 430

昭和48年3月1日

初版発行

昭和48年3月20日

6版発行

著者	おち 落	あい 合	けい 恵	こ 子
発行者	黒	崎		勇
発行所	しょう 祥	でん 伝		しゃ 社

東京都千代田区神田神保町 3-7

ニュー九段ビル 〒101

☎東京03 (265) 2081 (代表)

発売 小学館

印刷 昭和印刷 製本 大日本製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan

© Keiko Ochiai

祥伝社
ノン・ブック

スプーン一杯の幸せ

落合恵子おちあいけいこ

——愛を語る三つの形

NON BOOK



scene 13 52

II ESSAY スプーン一杯の幸せ……………59

Prolog 上から三番目の名札 60

I 恋……………65

青い麦 66

明日では遅すぎる 72

絶世の美女でなくなつて……………78

恋、この厚顔無恥なるもの 84

うちあけばなし 90

喪失からの出発 96

別れの美学 102

2 結婚……………107

3

日々………145

男と女 108

求婚・作戦勝ち

男というものは 120 114

女と妻の間で 126

君、急ぐことなかれ 132

小悪女志願 138

男ともだち 146

恥ずかしき人々・恥ずかしきもの 152

うそ・sin・crime 158

ひとりぐらし 164

ティファニーで昼食を 170

につき 176

煙が目にしみる 182

Ⅲ

NOVEL

目をそらさないで……………231

4

旅……………195

別れたひとと
188

たび
196

旅の空のサガン
204

異邦人いほうじんの中で
210

ラブ・フライト
216

街を捨て……………224

口絵・本文写真

三村 建次

スタイリスト

生沼みちよ

イラストレーター

渡辺 邦子

I
POEM
STORY

彼と彼女

scene 1

彼女は つぶやく
彼の 胸の中で

「サガンだったかしら？」

……女は男の体の下で
自分の匂い^{にお}を見つけた^{にお}のは……

彼女は指先で
彼の耳をくすぐりながら
また つぶやく

コレハ オーデコロンの匂い
コレハ 石けんの匂い
コレハ おソース

コレハ サラダ油

それから

彼女は

鼻にシワを寄せながら
わけしりがお
分別顔で 言う

「アナタ と ワタシ

ふたご
双児みたいに 同じ匂いね」

彼 と 彼女

長い夜を ユレながら

一本のローソクのように

彼女は

言う

トテモ おかしなことだけど
恋をするたびに

思ったものよ

これが最後の恋なんだって

そして

トテモ おかしなことだけど

それは いつも 最後ではなくて

アイロンをかけながら

彼女は 彼に話しかける

熱すぎると 絹きぬを痛めるわ

ぬるすぎても シワがのびないし

I 彼と彼女

恋については 余り真剣にならないことにしたの
彼女は 首をふりながら断言する

そのくせ

そのすぐあとに

「愛してる？」などと

真剣な目つきで、彼に
訊ねたりもするのだ

scene 3

むきたてのリンゴの
真珠色しんじゆの肌はだに
ポツンと血がにじみ

一瞬

青さめて

それから

テレ笑いをしている彼女

「ブキツチヨだな」

彼女の指の傷口を

強く吸いとる 彼

そのまま

I 彼と彼女

そのまま

四角い部屋を

真紅しんくに染めて

そのまま

そのまま

沈んでゆく

彼と彼女

scene 4

「やさしすぎるのよ」

そう言って

彼女は泣いた

なれない手つきで

シチューをつくりながら

彼女は泣いた

「やさしすぎるから ユワイのよ」

そう言って

彼女は泣いた

バラのトゲを

花バサミで おとしながら

彼女は泣いた

「いつもより やさしい夜

男の人は 必ず さよならをくれたわ
だから だから コワイノヨ」

彼女は もっと

激しく泣いた

「愛する女に

やさしさ以外の

なにを あげたらいいんだ」

彼はとまどいながら

青白い けいこうとうの下で

彼女の背中を

ゆっくり なでていた